

学 位 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

1. 申請者氏名	立本 千寿子
2. 審査委員	主 査：（鳴門教育大学准教授）小倉 正義 副主査：（兵庫教育大学教授）宇野 宏幸 委 員：（兵庫教育大学教授）石倉 健二 委 員：（岐阜大学准教授）吉澤 寛之 委 員：（鳴門教育大学准教授）内田香奈子
3. 論文題目 幼児の心身と音・リズムの聴取に関する心理学的研究－そだちの場における母体心拍音を軸として－	
4. 審査結果の要旨 学校教育実践学専攻学校教育臨床連合講座立本千寿子から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。 論文審査日時：令和3年2月22日（月） 17時00分～18時30分 場 所：兵庫教育大学神戸ハーバーランドキャンパス講義室3 およびオンライン（Zoom）による実施 1. 学位論文の構成と概要 音・リズムが人間に与える影響は、これまでも国内外において複数の分野で研究が進められ、その有効性が示されてきた。しかし、実際に保育・幼児現場や家庭などのそだちの場では、そのような有効性が理解され、保育生活や育児に活かされているとは言い難い。また、幼児にとって、家庭以外のそだちの場では1対1の関わりが保障されることは稀であるが、慣れ親しんだ母子関係や家庭といった空間から離れて、安心感をもって初めての社会で過ごすことは、幼児の心身の発達において重要である。 本論文では、音・リズムの聴取を軸として研究をすすめるが、音・リズムの中でもすべての人間が、同じくらいの期間、胎内で聴取して産まれてくる音・リズムであり、人種によってもその音色やテンポに大差や偏りが無い母体心拍音に着目して5つの研究を行った。そして、①母体心拍音の音・リズムが乳幼児に与える影響と実践での活用可能性に関して、そだちの場に関わる者の認識のバリエーションを検討すること、②母体心拍音の音・リズムを聴取した際とその他の音源を聴取した際の幼児の反応の違いを、心拍数を指標として明らかにし、母体心拍音を聴取することによる影響を検討すること、③母体心拍音と同じく、メロディー（旋律）のない音・リズムを、保育・幼児教育実践で用いることの意義について検討することの3点を目的とした。本論文は第1章から第5章で構成されており、以下にその概要を述べる。 第1章では、問題の所在を述べ、幼児にとっての音楽がもつ意味やそだちの場における音楽実践、胎児期から幼児期までの発達における原初的な音楽の世界について述べたうえで、本論文においてメロディー（旋律）のない音・リズムに着目することの意味を論じた。そして、母体心拍音の音・リズムにおける先行研究を概観し、本論文の目的に至るまでの流れについて述べた。	

第2章では、目的の①を検討した。具体的には、環境構成としての母体心拍音の音・リズムが乳幼児にどのような影響を与えるのか、そだちの場における母体心拍音の音・リズムが重要な他者と乳幼児の直接の関わりにおいて乳幼児にどのような影響を与えるのか、母体心拍音の音・リズムをそだちの場での実践に用いる可能性、の3点についてのそだちの場に関わる者の認識のバリエーションを検討した。なお、研究Ⅰでは医療従事者、研究Ⅱでは保育者、研究Ⅲでは親を対象として調査を行った。その結果、幼児にとって身近なそだちの場に関わる者は、母体心拍音の音・リズムに肯定的な認識を有することが示された。

第3章では、研究Ⅳで目的の②を検討した。具体的には、私立幼稚園ならびに認定こども園で幼児109名を対象に、無音の状態、オルゴール音聴取時、母体心拍音聴取時の幼児の心拍数を比較し、「母体心拍音の音・リズムは、無音やオルゴール音と比較して、幼児の心拍数を減少させるのではないか。」という仮説の検討を行った。その結果、母体心拍音の音・リズムは、無音やオルゴール音と比較して、幼児の心拍数を減少させることが示された。

第4章では、研究Ⅴで目的③を検討した。具体的には、母体心拍音と音や音楽的な要素は異なるものの、メロディー（旋律）のない音とリズムのみで構成される音楽構造が同じである手作り楽器（マラカス）の音・リズムの聴取・表現力と、幼児の探求的な行動との関連を検討し、音・リズムの聴取・表現力と幼児の探求的な行動との間に一部関連がみられた。また、研究Ⅴの結果をもとに、音・リズムを保育・幼児教育実践で用いることの意義について示した。

第5章では、第2章から第4章までの研究結果をまとめ、本論文の保育・幼児教育実践への貢献性と、本論文で得られた知見からの保育・幼児教育実践への提案を環境構成と活動を想定して論じた。そのうえで、今後の展望として、本研究の知見をさらに検討することと、第5章で提案した実践を検証することの必要性を述べた。

2. 審査経過

(1) 研究の独創性及び発展性について

本論文は、これまで幼児教育の中ではあまり注目されてこなかったが、子どものそだちを考えるうえで重要な母体心拍音の音・リズムを軸として検討した点で独創的である。本研究では、まず研究Ⅰから研究Ⅲでそだちの場に関わる者の母体心拍音に対する認識について検討した上で、研究Ⅳでは母体心拍音が幼児の心拍数を減少させることが示されている。そして、研究Ⅴでは、音・リズムの聴取・表現力と、幼児の探求的な行動との関連がみられる可能性が示されている。安心感と探求的行動が子どものそだちにおいて重要であることを考えると、本研究の結果をもとにさらなる発展が期待される。

(2) 学校教育実践への貢献、社会への貢献について

母体心拍音の音・リズムをはじめ、音・リズムは小さい頃から幼児の生活の中で常に存在し、幼児の表現や発達を考える上で重要なものである。本研究で得られた知見や、その知見をさらに深め、子どもの安心感と探求的行動を高める実践内容の検証をすすめることは、幼児教育実践に貢献できるものであり、さらに広く子育て支援に貢献できると考えられる。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は立本千寿子の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であるとは判断し、全員一致で合格と判定した。